入 学 式 式 辞

平 成 7 年 度

入学おめでとう。

比治山大学の学生になったことを心からお喜びいたします。私もこの４月から比治山学園に、席を置くことになり、皆さんと一緒に勉強することになりました。

私が今まで仕事をしてきた所は、広島大学の工学部が大部分で、２年前までは広島県立大学にいました。約40年前にヒューストンのライス大学での２年間が、ただ１回の私学の経験です。この大学の事を知る為に、建学の精神については前学長の豊島睦先生の「人倫の学としての建学精神」を読み、大学の歴史については「比治山学園史」に目を通しました。皆さんも一読することを薦めます。

比治山学園史の中に、私が小学校で習った、太田司朗、沖吉昌登、川崎員登の三先生の名前を見出し、懐かしく思いますとともに、今私がここの大学の学長として、ここに立っていることにたいし、何だか因縁のようなものを感じました。

比治山大学の開学は、昨年４月比治山女子短期大学の国文科の改組転換により行われ、現代文化学部が生まれました。比治山女子短期大学は、財団法人比治山学園が、昭和40（1965）年９月短期大学設置認可申請書を文部省に提出して、昭和41年１月に国文科の設置が決まり、４月15日に入学式を挙行した時から始まりました。昭和42年には家政科（現在の生活学科）、美術科の設置が認可され、昭和45年１月幼児教育科が設置されて、今日にいたりました。なお、昭和49年からまつ学寮。そして昭和57年女性文化研究センターを設置致しました。

本学の前身であります昭和高等女学校は、昭和14年の創立でありまして、当時の広島文理科大学、広島高等師範学校の教育実習校として、やがてはその付属高等女学校にすべく、理事長には広島文理科大学長の塚原政次先生、校長には、文理大名誉教授の新見吉治先生を迎えまして、文理大の博物教室を借りて、開校したのであります。戦争のため物資の不足、物価の高騰は進み、国民生活の困窮が次第に増し、学校の運営は波乱の多いものとなりました。

国信玉三先生は県当局の要請を受けて、昭和16年、昭和高等女学校の第３代校長に就任致しました。昭和18年、軍都広島なるが故に、昭和高等女学校の経営は、陸軍偕行社の手に移りました。校名も比治山高等女学校と改め、再出発致しました。

しかし、その２年後には終戦となり、経営母体の偕行社が解散団体に指定され、ここで、３たび改変致しましたが、国信先生の教育に対する、捨身のそして飽くなき執念をもってしても、今の姿に近い比治山学園が誕生する迄には、６年の歳月を要したのであります。学校法人「比治山

学園」は、初代学長国信玉三先生の、卓越した識見と、強い指導力、精神力の賜物により、比治山女子短期大学を昭和40年に発足させました。この人なくしてはこの大学はなかったといえましょう。

大学の使命

社会の人は大学をどのように見、何を期待しているか。ということから、自ずから大学の使命は決まるように思われます。1911年といえば今から84年も前の事ですが、Western Reserve UniversityのThwingという人が大学を次の４つの型に分類しました。

1．真理の発見とその発表　ドイツ型

2．思考力の養成を通じて人格の発展　Scotland, U.S.A.

3．紳士淑女の養成、　OxBridge

4．効用ある人間、将来生計を立てていける人間　東京北京カルカッタ

第４番目のカテゴリーは、発展途上国型です。時の文部大臣、山尾庸三は「人をつくらば、その人産業を起こすべし」という言葉を残しています。今日まで日本の大学の大部分が歩んだ道、発展途上国を卒業した日本の大学の使命は、１．真理の発見、２．人格の発展、３．紳士淑女の養成なのでしょうか。大学それぞれが決めるところです。

比治山学園には５訓として、正直、勤勉、清潔、和合、感謝があります。第３のカテゴリーを大学の使命として歩んでまいりました。

人間の成長には、生まれながらの素質もありますが、それよりもはるかに環境がひとを作り替えてゆくものであります。環境が人を作り替えた例として、歴史的に有名な事実として、紀元前200年頃、イタリヤにおいて、カンナエの会戦の翌日に、カプアはハンニバルに城門を開くことによって、ローマの恩に報いました。ローマの人々も、ハンニバルも、カプアの寝返りが会戦の最も重要な結果であり、また恐らく戦争そのものの運命を左右する、決定的な出来事とみなす点では一致しました。ハンニバルはカプアに入城し、そこを冬の陣地と定めました。すると誠に思いがけないことが起きました。一冬をカプアで過ごしたハンニバルの軍隊は、すっかり士気が緩んでしまい、その後は二度と再び、以前のように勝利を得る事ができなくなりました。

容易な環境が、文明の過程にある人間に及ぼす影響の恐ろしさをここに知る事ができます。これはトインビーの表現ですが、認知科学では「シナプスの可塑性」といい、脳の機能が経験により変わることを動物の実験で確かめています。シナプスは聞きなれない言葉だからちょっと説明しますと、ギリシャ語の「synapto（堅くからみつく）」からきた言葉で、神経細胞（ニューロン）が通信しあっている特定の場所のことです。

柳沢桂子Blue Backsの「脳が考える脳」という本をのぞいてみると、サルを使った実験で、神経回路の使い方によって大脳皮質の感覚領域が変化することが書いてあります。人間も同じですが、大脳皮質には、５本の指それぞれに対する感覚領域があります。サルの５本の指のうち３本

の指だけを使って円盤を数千回回転する訓練を受けさせると、回転に使った３本の指に対応する大脳皮質の領域は広くなり、その分、残りの２本の指に対応する領域が減ってしまいます。このように環境によって修正を受けながら、神経回路が形成されてゆくことが科学的に証明されています。

君達のいる環境が、トインビーの言う安易な環境であるならば、即刻抜け出して貰わねばなりません。そのために、これから学問をするみなさんがまず実行すべきことは、受け身で教育を受けるのではなく、自主的な自分の足で立って歩く、学問をすることです。大学での１単位は１時間の講義に対し１時間の予習と１時間の復習を15週続けてはじめて得られるのです。講義の聞きっぱなしでは学問になりません。

私がアメリカに留学した時のことです。沢山の宿題を前にして、これは大変だ、とても全部はできそうにない。友達のを写してやろうと軽い気持ちで、友達のノートを借りに行きました。答えは「NO」でした。なぜか。「これを君に見せると、君はこれより立派なレポートを書くに違いない。そうすると君には、良い点がつく」「その分だけ自分の成績が下がって、それが就職に影響する。」とも彼は言うのです。彼にとっては私は生存競争の相手なのです。「この問題についてのdiscussionならやろう。discussionは自分のレベルアップになる。」アメリカの大学生には、学生生活は生存競争であるという合理的現実を、まざまざと見せられるとともに、発展途上国日本の学生の自主性のなさを、しみじみと味わったのです。

宿題を写さない、人のレポートの真似をしない。これは非常に大切なことです。一度人の真似をするとそれが習慣になって、自分の考えようとする能力がだんだん減退します。先程のサルの使わない残りの２本の指の皮質領域のように退化することになっていくのです。

決して真似をしないことです。本田宗一郎はこんな風に言っています。オートバイを作るに当たって、外国の真似をするのは容易だが、真似をするのが嫌だから、自分の作り方でやろうと苦労した。彼らに追いつくまでに、時間をかけて努力した事が、追いついてから後の技術力の差になったと。

最初からリスクを覚悟で、あえて苦しい方向を取ることこそ大切なのです。真似をすることはその時は楽かもしれないが、後で苦しむことになるのです。エジソンは、発明は１％のインスピレーションと、99％のパースピレイションであるといっています。汗を流して苦労してはじめて創造力は生まれる。非常に含蓄のある言葉だと思います。

比治山大学には昨年入学した１回生がいます。皆さんが２回生として入学しました。皆さんが３年生になった時、比治山大学は完成して一人前の大学になるのです。１回生の皆さんと協力して、この大学のよき伝統を作るよう頑張ってください。

４年後に皆さんが先輩諸姉に負けない成果をあげることを期待します。

（Ｈ７．４．10）

平　成　8　年　度

今年入学した239名、並びに19名の３年編入の皆さんおめでとう。皆さんの入学は両親を初め家族の方々に祝福されるばかりでなく、比治山大学は理事長を初めとして大学の教職員一同、喜んで皆さんの入学を心から歓迎いたします。皆さんは「本学の開学３年目の入学生」となったのであり、リレー競技にたとえれば皆さんは本学の第３の走者であります。リレー競技では第３走者が弱いとその競技に勝てません。今日入学した皆さんは重大な役目を背負ってバトンを受け取ったのです。

比治山大学発展の基礎は実に３期生の皆さんの双肩に懸かっています。ここが皆さんの頑張りどころです。では一体「何を頑張れ」というのでしょうか。「本当の勉強をする」ことを頑張って欲しいのです。「本当の勉強とは何か」について少し触れてみたいと思います。アメリカのある大学の先生、この人は日本人ですが、その先生によると「ひと昔前と違って米国で接する日本人留学生の中には精神的に乳離れのすんでいないものが増えている。小学校から高校そして大学と受験一本のために、親も子供を甘やかすのが今の日本だ」と言います。そして米国の大学に行った留学生の中に「私は英語ができませんから授業でも試験でも大目にみて下さい」とぬけぬけいう日本人留学生がいるというのです。まるで留学したのは誰か人のためであるといわんばかりなのです。このように取り上げて話すと、そんなことはないと冷静に答える人もいるのですが、「それは当たり前である」と思う人もいるのです。

もしみなさんが、このような考えを持っていたとすれば、このことは受験勉強後遺症の最たるものです。早速心を入れ替えて貰わなければなりません。皆さんは、高等学校時代「いかにして入学試験の成績を上げるか」という極めて受験技術的な訓練に、大きな時間を割いてきたと思います。現代の受験制度の中では、避けて通れないことのようですが、しかし今日こうしてこの大学にはいったからには、そのような勉強の態度はさらりと捨て去らねばなりません。勉強は他人のためにするものではありません、自分のためにするものです。そうすることが結果的に親のためにもなるでしょうし、広く人類全体のためになることにつながるのです。

明治時代の文部大臣森有礼は「大学は学問の場である。小中学校は教育の場である。」と言っています。学問と教育が使い分けられています。分かりますか。彼の言う教育とは「先生から教えられる」、つまり受け身の姿勢での勉強のことです。それに対して学問とは「自発的に自分の意志で学びとって行く」勉強のことです。皆さんは今大学という学問の場に入ってきたのです。自発的に自分の意志で学びとって行かねばなりません。大学は諸君に進んだ知識というものを与えることはできますが、智慧というものは与えることはできません。それは大学で教えられるものの中から諸君が引き出すこと、「education」によって得られるものです。大学で教育を受け、学問するということは知識を与えられて智慧を獲得することです。これが本当の学問なのです。

私は学生時代グライダー部にいたので、学問することをグライダーの操縦にたとえて話してみます。自動車なら車輪がついているから、エンジンがかかれば動き出します。はじめて乗っても何とか操縦できるでしょう。ところがグライダーの操縦は車のように簡単ではありません。相当の覚悟が必要です。まかり間違えば命に関わります。グライダーは初心者が練習するのをプライマリー機と言い、機体の前部にフックがあり、それにゴム索をかけて12人が引きます。君達がはじめて操縦席に座ったとします。単独飛行です。そのためには何と何を知っていなければならないと思うか考えて見てください。最初から２、３メートルという高さを飛ばすわけにはいきません。最初は地上滑走です。引く強さに応じて飛べる高さが決まります。教官の「放せ」の号令で、アンカーの止め索を放すと、パチンコよろしくグライダーははじき出されるのです。出発のショックは大丈夫か。傾いたら直せるか。もし地上滑走でなくて浮き上がったらどうするか。最小限これくらいのことに対応する操作方法は知って、操縦席に座るのです。「放せ」の号令がかかって機体が飛び出して止まるまでは、相談する人は誰もいません。全部自分で判断し実行するのです。起こりそうなことは前もって考え、必要な知識はあらかじめ調べておかねばなりません。地上滑走は地上を滑るだけです。その間に出発のショック、平衡感覚を実地に自分で体得しておきます。こうして地上滑走の智慧がつくのです。地上滑走がうまくいくと、今度は前より少しゴム索を引く強さを増して、１メートルくらいの高度で飛ぶ。数回うまく飛べると３メートルに上がる。出発してから地上に着陸するまでは他人に手伝って貰うことができない。この操縦席に座った心構えこそ、これから大学で学問を始める心構えでなくてはならない、と思うのです。

1994年の末ごろ、シュピーゲル誌がドイツ人の教養の度合を調べるために、文学・歴史・音楽など16の領域に関して約100項目にわたるアンケート調査を行いました。幾つかの結果をここに引いてみましょう。「ゲーテの作品をあげよ」という質問に対して、「一つも知らない」と答えた人が34%、一つだけ知っている（大半が「ファウスト」）が33%。「若きヴェルテルの悩み」など、ゲーテの残した数多くの文学作品は、大多数のドイツ人にとっては、もはや共有財産ではないらしいのです。また「未完成」がシューベルトの作品、「エロイカ」がベートーベンの作品であると正答できた人の割合が、それぞれ10%と21%が正しく説明できました。いずれも本来いわば「常識」に属すると思われる事柄です。伝統的な教養とは、「人格の陶冶を目指した文化の習得」ですが、この「教養」の理念の発祥の地であるドイツにおいても、教養が危機に瀕しているのです。

皆さんはこの大学で豊かな教養を身につけるためにも、また智恵を獲得するためにも努力を続けて頂きたいと思います。大学で学問するにはまず第一に予習をする、講義を聞く、そして復習する。大学での１単位と言うのは１時間の予習と１時間の授業と１時間の復習を15週続けることです。そして初めて１単位が得られるのです。

最後に「21世紀前半を生き抜く諸君達に求めるものは何か」について述べてみたいと思います。20世紀初めには社会主義の国が誕生し、20世紀末にはペレストロイカで修正し、東西ドイツ

の統一という新しい芽生えがありました。これらの諸事情は21世紀の世界には大きな変化があると予想させます。この変動を乗り切って行くためには、新しい技術の開発につとめること、情報の分析能力に優れていること、社会福祉・社会保障を充実させること、および国際交流による平和共存に献身することが要求されます。この姿勢でこの大学において「本当の学問」に精進して欲しいのです。心に悔いのない有意義な学生生活をこの大学で送って頂きたいと思います。

(H 8. 4. 10)

平 成 9 年 度

皆さん入学おめでとう。比治山大学の学生になったことを心からお祝いします。入学式の良き日に当たり、所懐の一端を述べて、祝辞と致します。

我が比治山学園の建学の精神の根源は「慈愛の心」です。ご承知の通り、人間の心的要素は「知・情・意」であり、このバランスもまた大切なのです。

この知情意ということを大脳の仕組みから考えてみますと、人間の脳では、大脳皮質の真ん中に、中心溝という深い溝があります。その後ろの方はものを見る、見えるといった外からの信号を受けて処理する部分で、いわゆる「知能の座」と考えられています。中心溝の前の方は大脳で作った信号を外へ出す部分で、これは「意の座」です。では情はどこかというと、大脳半球の内側に、大脳辺縁系があり、ここが情を担当しています。我々の知・情・意は、大まかには、こういう分布をしています。

「好きこそものの上手なれ」といいますが、何でも上手になるには、まずそれが好きになることが大切です。勉強でも稽古ごとでも、初めのうちは嫌々やっている場合が多いのですが、親に誉められるとか、先生に誉められたとかがきっかけで、それが好きになる。自分でやる気が起こってくる。つまり、自分が今やっていることに、意欲を持ってやることで、脳の中に自発的に神経回路ができあがってきます。だから何事でも、好きだからそれを熱心にやる。熱心にやるから上達する。これがプロに繋がる道になるのです。そして、好きでやっていることは疲れませんし、疲れても解消されやすいのです。

こういう現象の「知情意」との関係ですが、何か情報が入ってくると、従来は知・情・意の順番で処理されていると考えられていました。つまり外部情報は大脳皮質で処理される（これが知です)、そして大脳辺縁系、情の部分に送られ、意欲が起こって、信号を外に出す、つまり行動する（これが意です）と考えられていました。ところが最近は、入った情報を「好き」と判断して、つぎにやろうという意欲がわき、知が働いて行動を起こす。つまり情意知という順序になるのではないかとの説もあります。つまり、人間の行動のもとは、情からスタートするというわけです。

そういった意味からも私は皆さんに、「大学生活を全て好きになって欲しい」と言いたい。大学は高校時代に比べ、大幅な自由が認められています。例えば授業の時間割も自分で組むことができるような裁量も許されています。このような自由を上手に使って何よりもまず「我が比治山大学」を、そして「比治山大学生としての自分自身」を、好きになって下さい。

さて、皆さんはこれから大学で学ぶわけですが、社会の人が大学をどのように見、何を期待しているかによって、自ずから大学の使命は決まるように思われます。1911年といいますから、今から85年も前になりますが、Western Reserve UniversityのThwingという人が大学を4つの型に分類しています。それによると、「1．真理の発見とその発表」、「2．思考力の養成を通じて人格の発展を計る」、「3．紳士淑女の養成」、「4．効用ある人間、将来生計を立てていける人間の養成」です。第4番目のカテゴリーは、発展途上国型で、明治以来の日本はこの型を取り続けた時代でした。そこで当時の文部大臣、山尾庸三は「人をつくらば、その人、産業を起こすべし」という言葉を残しています。今まで日本の大学の大部分が歩んだ道は何であったでしょうか。すでに発展途上国を卒業した日本の大学の使命は、1の「真理の発見」なのか、2の「人格の発展」なのか、3の「紳士淑女の養成」なのか、今や大学それぞれが決めるところであります。比治山学園には5訓として、正直、勤勉、清潔、和合、感謝があります。これは先の分類の中の第3のカテゴリーを大学の使命として歩んで来たといえましょう。

さて大学の教育は一般教育と専門教育に二分されていますが、最近のアメリカで、一般教育の目的について論議されているところを見ると、学生の探求心、論理的思考力、批判的分析力、数理的理解力、言語的表現力を育て、歴史、自然、芸術に対する受容の態度を豊かにし、異文化の経験や国際感覚を養うことを一般教育の意義としています。それにより物事を深く考え、学ぶ習慣を身につけさせることを重視しています。このように物事を深く学ぶ習慣を身につけることは、極めて大事なことであります。そしてさらに一般教育には、単に幅広い知識を授けるだけでなく、市民としての責任をも合わせて持ち、それを誇りとする精神も必要ではないでしょうか。

専門教育の捕らえ方としては二つあります。「すぐに役立つ教育」をしようとする、いわゆる、「追いつけ追い越せ型」の教育と、「能力伸張の基礎を与える教育」として捕らえる認識です。しかし、「すぐに役立つ教育」をする、という教育は、教育というよりも訓練の性格を持つようになります。当座の役に立つかもしれませんが、その能力の永続性に疑問が残ります。と同時に、それによって大学教育の本質が損なわれる危険すら生じてくるのです。そこで「能力伸張の基礎を与える教育」として、「適性の発見」が教育の大きな前提条件として浮かび上がり、専門教育に際しては、きめの細かい配慮が必要になってきます。諸君はこの4年間に自分の能力適性をさらに伸長すると同時に、今まで気付かなかった潜在能力をも発見し、それを育てることに生きがいを見出して下さい。そしてそれらを手助けして下さる素晴らしい先生方に巡り合う喜びをぜひ体得して下さい。

最後に臨教審答申は、21世紀に求められる日本人の資質とその具体的目標として、「1．広い

心とゆたかな創造力」、「2．自主・自立の精神」、「3．世界の中の日本人」をあげています。1と2は人間の総合能力によること大、と指摘しています。このような時代の要請の真っ只中に皆さんは、比治山大学生としての輝かしい第1歩を踏み出すことになりました。20世紀もあと3年。21世紀を生きる皆さんは、この目標を心において、これからの大学生活を設計し、その設計図にしたがって、有意義な学生生活を送って下さい。　(H 9．4．10)

平　成　10　年　度

皆さん入学おめでとう。比治山大学、大学院、現代文化学部、短期大学部および専攻科の学生になったことを心から歓迎いたします。入学式の良き日に当たり、所懐の一端を述べて、歓迎の辞と致します。

1．まず比治山学園には今日に至るまでの歴史、次に2．設立当時、設置者の描いた基本構想は何であったか、そして、3．大学の使命は何か、の3点について述べようと思います。

本学の前身であります昭和高等女学校は、昭和14年の創立でありまして、当時の広島文理科大学、広島高等師範学校の教育実習校として、やがてはその付属高等女学校にすべく、理事長には塚原政次広島文理科大学長、校長には新見吉治文理大名誉教授を迎え、文理大の博物教室を借りて開校したのでありますが、当時の広島は軍隊の町と言われていた事情もあって、経営は昭和18年に陸軍偕行社の手に移りましたが、その2年後には終戦となって、経営母体の偕行社が解散団体に指定され、戦後多難な運命が待ち構えていました。当時の校長国信玉三先生の、教育に対する捨身のそして飽くなき執念をもってしても、今の姿に近い比治山学園が誕生する迄には、6年の歳月を要したのであります。学校法人「比治山学園」は、初代学長国信玉三先生の卓越した識見と、強い精神力、指導力の賜物により、比治山女子短期大学を昭和41年に発足しました。この人なくしては現在の大学はなかったといえましょう。

「比治山学園史」によりますと、学校法人比治山学園が、昭和41（1966）年に国文科を設置し、4月15日に入学式を挙行致しました。ここが大学の始まりです。家政科（現在の生活学科）と美術科は昭和42年に、幼児教育科は昭和45年に設置致しました。そして平成6年には国文科を改組して、比治山大学現代文化学部をスタートさせました。完成年度につながって、今年大学院を開設することができ、16名が入学いたしました。また女子短期大学は、短期大学部と改称いたしまして、全学を通じ、男子学生の受け入れをいたしました。

今日、大学は1つの大きな転換期に立っております。比治山学園では、国信先生の建学精神とも言うべき「親に応え、精進する」という心の問題が、設置者の描いた基本構想の中にあります。そこには、人間の心的要素は知・情・意であり、このバランスが大切であることが述べられています。そこで、この知情意と人間の行動との問題を考えてみましょう。

人間の脳では、大脳皮質の真ん中に、中心溝という深い溝があります。その後ろの方は視覚信号のような外からの信号を受けて処理する知能の働きをする部分で、いわゆる知の座だと考えられるものがあります。中心溝の前の方は大脳で作った信号を外へ出す部分は、意志を司る意の座があります。では情はどこから発せられるかというと、大脳半球の内側に、大脳辺縁系があり、ここが情を担当しています。我々の知・情・意は、大まかには、こういう分布をしています。

「好きこそものの上手なれ」といいますが、何でも上手になるには、まずそれが好きになることが大切です。勉強でも稽古ごとでも、初めのうちは嫌々やっている場合が多い。親に誉められるとか、先生に誉められたとかがきっかけで、それが好きになる。自分でやる気になる。つまり、自分が今やっていることに、意欲を持つことができるのです。意欲を持ってやることで、脳の中に自発的に神経回路ができるわけであります。好きと判断するのが情で、司令信号を出すのが意で、信号を受けて処理するの知です。つまり情・意・知という回路を頭の中に作るのです。

何事でも好きだと、それを熱心にやる。熱心にやるから上達する。これがプロに繋がる道になるのです。そして、好きでやっていることは疲れませんし、疲れても解消されやすいのです。そういった意味からも、皆さんはこれからの大学生活を、まず好きになってください。そしてそれを基点として、これからの生活を送って欲しいのであります。

さて、皆さんがこれから大学生活を送ろうとするにあたり、「大学の使命は何か」と当然考えていることでしょう。

スペインの哲学者、オルテガ・イ・ガセットの「大学の使命」という書物を最近読んで、強く賛同したので、その内容の一部を紹介します。その中で大学は第１に平均人が受けるべき高等教育として存立する。この平均人は何よりもまず、教養ある人間にすること、即ちその時代の高さへと導くことが必要である。大学の中心的課題は、教養の教育にあるといわれますが、教養とはその時代の最高水準を示す理念の体系ともいうべきで、その内容は大部分が科学からなっています。我々は現存在を解釈するためにぜひ必要なものは科学から汲み取っていますが、科学は科学技術に属する多くの断片に過ぎないのに対し、教養は世界と人間についての一つの完全な理念を必要としています。従来、教養という概念は漠然とした形で受け取られ、ややもすれば有閑人の装飾的な添え物として考えられる嫌いがありましたが、文化とか教養は人間の生命から切り離すことのできぬもの、人間実在の本質的次元というべきものであります。

オルテガの求めている大学像とは、教養を積むことによって人の生き方を考えようとするものなのです。大学に入学した皆さんが従来のように生徒と呼ばれないで学生と呼ばれるのは「生を学ぶ」もの、つまり人の生き方を学ぶものであるということを十分にわきまえてください。

次に申し添えたいのは、今日社会に蔓延している最大の病根というべきもののことです。これは「だらしなさ」という一言で表現できるのであって、国、大学、個人の振る舞いに、礼儀作法も、自尊心も品位も欠如していることでまことに残念なことです。このだらしなさに対立するものは、スポーツの用語でbe in formと言う語です。つまり「フォームが決まっている」ことです。

スポーツにおいて、好調であるときと不調であるときとでは、同じ人でもその結果に大変な相違のあることは、皆さんもよく知っているところです。一見別人ではないかと思わせるようなその相違は、ほんのわずかの所作の違いに過ぎません。しかしこのフォームが決まっている状態は、自分で獲得していかなければならないのです。自分でやり始め、自分の進歩に全力を集中し、トレーニングを継続する。もっと機敏に、もっと張り切って、もっと軽快にやって、現状を凌ぐ手並みを見せようとの決意を固め、多くの余分のことは放棄してかからねばならないのです。要するにフォームが決まっているとは、すべて気まま放恣に発散することではありません。たとえば「とにかくやろうじゃないか」、「どっちでもいいよ」、「まあその辺のところだ」、「それがどうしたというのだ」などとよく言いますが、これではいけないのであって、だらしなさ、ぞんざいさの反対でなければならないのです。要するにきちんとした導入から正しいフォームを作ること、これが大切なことです。どうか皆さんは、これからの大学生活において自分のフォームを作ることを心がけてください。

21世紀に求められる日本人の資質とその具体的目標として、臨時教育制度審議会の答申は「1.広い心と豊かな創造力」、「2.自主・自立の精神」、「3.世界の中の日本人」をあげております。皆さんはこれからの大学生活のスタートに当たり、どうか「独立して解析適に考える能力を養い、リスクを乗り越える勇気を持ち、創造的に行動する」ことを心がけてもらいたいのであります。

(H10.4.7)

平成11年度

入学おめでとう。比治山大学、現代文化研究科12名、現代文化学部259名、短期大学部454名、専攻科2名の皆さんを心から歓迎します。

比治山学園の建学精神は、国信玉三先生の教育理念に基づいています。その教育理念は「悠久不滅の生命の理想に向かって精進する人間の形成」と表現しています。豊島睦前学長は「人倫の学としての建学精神」という本を書きました。その中では、建学精神の根元は慈愛の心であります。人間の心的要素は知・情・意であり、このバランスが大切である。と結んでいます。この知・情・意について、これらの働きを脳の機能の面から考えてみましょう。

心につながる仕組みとして脳があり、情の座、意の座および知の座として機能している、ということは諸君も高校で学んだかもしれません。脳の科学の最近の研究によると、情報が入ってきて、これを好きとか嫌いとか、すぐ判断するところは、情の座で大脳偏縁系が担当しています。情報が入ってきて、これが即座に、好きと情動判断されると、前の方の意の座に伝わる、ここには指令部の働きをする前頭前野があります。ここから「接近せよ」の命令が出ます。この情報は知の座に伝わります。知の座には、関連する情報が感覚野に統合されています。高次の情報処理

が行われるのです。

柳沢桂子という人の書いた「脳が考える脳」という書物によると、サルに円盤をまわす実験をやらせた。5本の指のうち、3本の指だけを使って円盤を数千回、回転する訓練を受けさせると、回転に使った3本の指に対応する大脳皮質の領域は広くなり、その分、残りの2本の指に対応する領域が減ってしまった。神経回路は、このように環境によって修正を受けながら、形成されてゆきます。人間の脳も同じことで、いかに訓練が大切であるかを教えてくれるのです。

ロシヤの話で、こんな事例があります。囚人が独房に入れられていましした。刑罰として、次のような単純作業を課しました。それはバケツが二つあって、一方のバケツの水を他方に移す、という作業を繰り返させるのです。数日のうちに、ほとんどの囚人が狂ってしまったといいます。これらの囚人は、この作業が永久に続くのではないかという不安と、その不安を癒すことのできない孤独さの中で、脳の活性が上がらず、狂ってしまったものと考えられるのです。しかし、その中で何人かの囚人は将来に希望を抱き、バケツの水移しは、肉体を鍛えておくためのもので、そんな単純作業にも価値があると考えたので、このような状況下にあっても、精神の健康を維持できたとのことです。この話は何事をするにつけても将来に希望を抱いて、意欲的に物事を行うことの大切さを教えてくれます。

脳は意欲で働くコンピュータであるといわれます。仕事でも勉強でも、自分の行わんとするものをまず好きになることです。好きこそものの上手なれというではないですか。好きになって大いに意欲を奮い立たせること、脳を活性化することが大切なのです。そこで、私は諸君に「大学が好き」になってほしい。「学問をすることが楽しい」という気持ちを持つようになってほしいと言いたいのです。

スペインの哲学者、オルテガ・イ・ガセットの「大学の使命」という書物に、私は強く賛同しました。昨年の入学式にも話したことですが、「大学は第一に平均人が受けるべき高等教育として存立する。この平均人は何よりもまず、教養ある人間にすることである。」ということです。大学の中心的課題は、教養の教育にあるといわれますが、教養とはその時代の最高水準を示す理念の体系ともいうべきで、その内容は大部分が科学からなっています。我々は現存在を解釈するためにぜひ必要なものは科学から汲み取っていますが、科学は科学技術に属する多くの断片に過ぎないのに対し、教養は世界と人間についての一つの完全な理念を必要とします。従来教養という概念は漠然とした形で受け取られ、ややもすれば有閑人の装飾的な添え物として考えられるきらいがあったが、文化とか教養は人間の生命から切り離すことのできぬもの、人間実在の本質的次元というべきものであります。オルテガの求めている大学像とは、教養をつむことによって人の生き方を考えようとするものなのです。大学に入学した皆さんが従来のように生徒と呼ばれないで学生と呼ばれるのは「生を学ぶ」、つまり人の生き方を学ぶものであるということを十分にわきまえてください。

わが国初代の文部大臣で、明治時代のわが国の学制改革に多大の貢献をした森有礼は「大学は

学問の場である。小中学校は教育の場である。」と言っています。学問と教育が使い分けられているのです。分かりますか。彼の言う教育とは「先生から教えられる」、つまり受け身の姿勢での勉強のことです。それに対して、学問とは「自発的に自分の意志で学びとって行く」勉強のことです。皆さんは今、大学という学問の場に入ってきたのです。自発的に自分の意志で学びとって行かねばなりません。

次に申し添えたいのは、今日社会に蔓延している最大の病根というべきもののことです。これは「だらしなさ」という一言で表現できるのであって、国、大学、個人の振る舞いに、礼儀作法も、自尊心も品位も欠如していることでまことに残念なことです。

このだらしなさに対立するものは、スポーツにおいては、「フォームが決まっている」ことです。好調であるときと不調であるときとでは、同じ人でもその結果に大変な相違のあることは、皆さんもよく知っているところです。一見別人ではないかと思わせるようなその相違は、ほんのわずかの所作の違いに過ぎません。しかしこのフォームが決まっている状態は、自分で獲得していかなければならないのです。自分でやり始め、自分の進歩に全力を集中し、トレーニングを継続する。もっと機敏に、もっと張り切って、もっと軽快にやって、現状を凌ぐ手並みを見せようとの決意を固め、多くの余分のことは放棄してかからねばならないのです。要するにフォームが決まっているとは、すべて気まま放悉に発散することではない。たとえば「とにかくやろうじゃないか」、「どっちでもいいよ」、「まあその辺のところだ」、「それがどうしたというのだ」などとよく言いますが、これではいけないのであって、だらしなさ、ぞんざいさの反対でなければならないのです。要するにきちんとした導入から正しいフォームを作ること、これが大切なことであります。どうか皆さんは、これからの大学生活において自分のフォームを作ることを心がけてください。

これから送る4年、あるいは2年間というのは、君たちの人生の中ではきわめて短いものではありますが、また色々なものを試すことのできる貴重なときでもあります。「独立して、解析的に考える能力を養い、リスクを乗り越える勇気を持ち、創造的に行動する」これが諸君のこれからの行動目標です。リスクを乗り越えるときには、サマセト・モームの言葉で「やらずに後悔するよりやって後悔せよ」というのがあります。私の好きな言葉です。実行したら、絶対、将来後悔しないぞ、全部成功して見せるぞ、失敗しても、無理やりこじつけて、これは成功だと思い込むのです。

諸君のこれからの比治山学園での生活を通して、脳の活性化に期待するものであります。

(H11. 4. 7)

平 成 12 年 度

諸君、入学おめでとう。先ほど入学を許可した753名の諸君は、西暦2000年の入学生です。偶然とはいえ、ミレニアムの年に大学生活をはじめることになったということは、誠に意義深いものがあります。

我が比治山学園の歴史は、昭和14（1939）年に、広島文理科大学の付属校として設立された、広島昭和女学校から始まっていますが、発足間もない頃の校長でもあり、比治山女子短期大学の創立にも功労のあった国信玉三先生の教育理念であった、「悠久不滅の生命の理想に向かって精進する人間の形成」を中心とした有為の人材の育成を続けて来て、広島における私学教育界の雄として今日に至ったのです。平成10年度より男女共学制を実施し、同時に大学院も発足し、３名の社会人を含む11名の修士の諸君が今年巣立ったのです。

さて、大学は高校の単なる延長ではありません。諸君達は、生徒から学生へと脱皮した学園生活を送ることになったのです。では、大学とはどんなところでしょうか、何を学ぶところでしょうか？　スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットの「大学の使命」という書物によると、このようなことが述べられています。大学の中心的課題は、教養の教育にある。従来教養と言う概念は漠然とした形で受け取られ、ややもすれば有閑人の装飾的な添え物として考えられるきらいがあったが、文化とか教養とは、その時代の最高水準を示す体系とも言うべきもので、人間の生命から切り離すことのできぬもの、人間実在の本質的次元と言うべきものなのである。かくして、オルテガの求めている大学像とは、教養を積むことによって人の生き方を考えようとするもので、大学に入学した諸君が、従来のように、生徒と呼ばれないで「学生」と呼ばれるのは、「生を学ぶ」つまり生き方を学ぶものなのだ、と言うことを十分わきまえて欲しいのです。

このように大学とは、学ぶ所、自己を磨く所です。しかるに、一部では「大学は自由な所、何をやってもいい所」といった点を曲解している向きもありますが、これはとんでもない誤解と言わなくてはなりません。自由には責任とそれを全うするための努力が伴うものであることを忘れないで欲しいと思います。このような誤解が、最近世間でいわれている大学生の学力低下の原因を作ったのではないかと思われます。本年三月末に発足した教育改革国民会議においても、従来の「ゆとり教育」のあり方を反省しようとの意見が出たり、これに連動して、新しい学力の充実を求める声はこれからの大学の課題ではあるまいか、と考えるのです。

我が比治山大学のスタッフ一同は次のように考えています。「21世紀に向けて、我が国が国際社会の中で先導的な地位を保つためには、そして諸君が国際人として活躍するためには、どこの国の大学生との競争にも打ち勝てるだけの実力と教養を身につけさせる責務がある」ということです。

最近、我が国の大学の中で特に注目を浴びている大学に、青森公立大学があります。ここでは、

「大学は受験勉強に疲れた若者の休息の場所ではない。入学したからといって、卒業することが必ずしも保証されるものではない」として、この大学の所定のレベルに学業成績が到達しない場合は、留年はもちろんのこと、その途中において退学を勧告されることなどを入学当初から周知徹底させています。もちろん優れた成績をあげたものには、成績優秀賞が与えられるような評価法「GPAシステム」を導入し、学生のやる気を起こさせ、これを助長するよう大学全体が取り組んでいます。これが功を奏し、100%に近い就職率を上げているのです。このような試みに習う大学も最近あちこちに出はじめています。

こう述べると、大学での生活はとても大変なことのように思ったり、学問は苦手と尻込みしたくなる人がいるかもしれません。しかし、諸君達はちょうど知的好奇心、記憶力、理解力等の旺盛な時期を学問に打ち込み、学ぶことの楽しさ素晴らしさをぜひとも十分に味わって欲しいのです。よく学び、優れた成績を上げるということは、決して至難の業ではありません。そのコツを披露しましょう。世の中、特に教育関係者は「知・情・意」という言葉を良く口にします。立派な人間になるための条件のようなものですが、この知情意の働きは、大脳生理学ないしは心理学的に見ると、少し考え直す所があります。およそ人がものを見たり聞いたりすることはすべて大脳でそれらの情報が処理され、快いと感じたり、不快に感じられることは、みなも知っているところです。つまりこれが「情」といわれるもので、その「情」がその人のやる気・やらぬ気の原動力になるものです。そこで「やってみよう・やってみたくない」と言った「意」が湧く。その意の力が課題に取り組もう、解決しようという行為となり、その産物として「知」が形成されるのです。

最近、小学校でも中学校でも勉強嫌いの子供が増えたのは、いま言った情・意・知の自然な流れをいきなり難解な「知」がぶつけられることで混乱を生じ、難しい、嫌だ、という「情」を起こさせ、「もうやめた」という意欲喪失の行動に追い込まれる結果に他ならないのではないでしょうか。だから諸君は、我が比治山大学のキャンパス生活の中で見聞きした、興味や関心を引くものを何でもよい、まず見つけ出すことです。それは講義の題目でもよい、内容でもよい、また先生との出会いや会話の中でもよい。そのことを、まず「面白そうだ」、「好きになれそうだ」と近づいていこうとすることです。つまり「情」が湧けば「意」が起こり、学ぶ楽しさが分かり、それが「知」となり充実した知的生活が約束されるようになるのです。だから、まず今日からこの大学が好きになること、比治山大学を好きになって欲しいのです。そうなれば道は自ずと開けてきます。明日といわず、今から実行して欲しいと思います。

最後に、我が学園には、五訓という精神的バックボーンとなるモットーがあります。それは「正直・勤勉・清潔・和合・感謝」の５つです。これは学園の歴史とともに歩んできました。私はそれに加えて諸君に、「独立して解析的に考える能力を養い、リスクを乗り越える勇気を持ち、創造的に行動する」という気概を持つことを薦めます。このことは、大学案内にもうたってありますが、現在の若い人々に欠けているものはチャレンジ精神ではないかと思うからです。中国の

諺に「三日会わざれば即ち刮目すべし」というのがあります。「人は、僅か3日会わないうちに、どれほど勉強し成長しているかわからない。今度他人と会うときは、そのくらいの気持ちで、よく目をこすって相手の変化ぶりを見よ」という意味です。今日ここで本学に入学を許可された諸君が2年間ないし4年間の勉励研鑽を積んで、この学園を巣立つときは、一回りも二回りも大きくなって、諸君の師や両親達の目を見晴らせるような存在になるよう、ただいまから決意を新たにして、スタートすることを期待します。 (H12. 4. 4)

平 成 13 年 度

諸君、入学おめでとう。先ほど入学を許可した現代文化学部288名、現代文化研究科12名、短期大学部381名および専攻科8名の諸君は、21世紀最初の入学生です。偶然とはいえ、新世紀のスタートの年に大学生活をはじめることになったということは、誠に意義深いものがあります。

我が比治山学園の歴史は、昭和14 (1939) 年に、広島文理科大学の付属校となるべく設立された、広島昭和女学校から始まっていますが、発足間もない頃の校長でもあり、比治山女子短期大学の創立にも功労のあった国信玉三先生の教育理念であった「悠久不滅の生命の理想に向かって精進する人間の形成」を中心として、有為の人材の育成を続けて来ました。比治山大学は平成10年度より、男女共学制を実施し、同時に大学院も発足して今日に至ったのです。

では、大学とはどんなところでしょうか、何を学ぶところでしょうか？ スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットの「大学の使命」という書物によると、次のようなことが述べられています。大学の中心的課題は、教養の教育にある。従来教養と言う概念は漠然とした形で受け取られ、ややもすれば有閑人の装飾的な添え物として考えられるきらいがあったが、文化とか教養とは、その時代の最高水準を示す体系とも言うべきもので、人間の生命から切り離すことのできぬもの、人間実在の本質的次元と言うべきものなのである。かくして、オルテガの求めている大学像とは、教養を積むことによって人の生き方を考えようとするもので、大学に入学した諸君が、従来のように、生徒と呼ばれないで「学生」と呼ばれるのは、「生を学ぶ」もの、つまり生き方を学ぶものなのです。

大学は、高校の単なる延長ではありません。諸君達は、生徒から学生へと脱皮した学園生活を送ることになったのであります。大学で学ぶ内容が世の中に出てすぐ役立つものとは限りません。大学とは『人類が蓄積してきた知的財産を継承する場である』ことを忘れてはならないのです。このように大学とは、学ぶ所、自己を磨く所です。しかるに、一部では「大学は自由な所、何をやってもいい所」といった点を曲解して、レジャーランドと考えている向きもありますが、これはとんでもない誤解と言わなくてはなりません。自由には責任とそれを全うするための努力が伴うものです。このような誤解が、最近世間でいわれている大学生の学力低下の原因を作ったので

はないかと思われるのです。

ある企業の募集案内によると、望ましくない人として、「現在の職場がいやで、何処でもいいから変わりたいというような人」、「会社を離れたら仕事のことは一切考えたくない人」、「一晩でも徹夜すると明日の仕事に差し支える人」を挙げ、逆に求める人材とは、「知能指数や学歴ではなく、何か自分でやってみたい人、自己表現をしてみたい人」、「基礎学力、常識の涵養に努める人」、こういった人材を求めているのです。企業は大学をレジャーランドとして暮らした学生を峻別する方法を色々考えています。

私はこれから我が大学では「GPA」による評価をしようと思っています。GPAとは何か。それは諸君の本学における学業成績は優・良・可・不可、数字で示すと３・２・１・０と評価されます。そのそれぞれの科目の単位数をかけて合計して取得した総単位数で割れば、１単位当たりの評価点が算出されます。これをGPAと言っています。もしも、このGPAの値が1.2以下であるということは、はっきり言って勉強しなかったということです。1.2以下を取ったものの数をクラス全員の数で割ると、クラスの不良率が出るのです。諸君の成績評価GPAが1.2以下になって不良率を大きくすることのないよう、まず入学当初にお願いしておきます。皆成績が良ければ、オール３ということもあります。不良という成績が２期も続くようで、勉学意欲が認められない場合には、退学勧告を受ける事になるかも知れぬと覚悟して下さい。諸君達は、ちょうど知的好奇心、記憶力、理解力等の旺盛な時期を学問に打ち込み、学ぶことの楽しさ素晴らしさをぜひとも十分に味わって欲しいのです。よく学び、優れた成績を上げるということは、決して至難の業ではありません。

そのコツを披露しましょう。世の中、特に教育関係者は「知・情・意」という言葉を良く口にします。人間形成の条件のようなものですが、この知情意と人間の行動との問題を考えてみましょう。人間の脳では、大脳皮質の真ん中に、中心溝という深い溝があります。その後ろの方は視覚信号のように外からの信号を受けて処理する知能の働きをする部分で、いわゆる知の座だと考えられるものです。中心溝の前の方は大脳で作った信号を外へ出す部分で、意志を司る意の座があります。では情はどこから発せられるかというと、大脳半球の内側に大脳辺縁系があり、ここが情を担当しています。我々の知・情・意は、大まかには、こういう分布をしています。「好きこそものの上手なれ」といいますが、何でも上手になるには、まずそれが好きになることが大切です。勉強でも稽古ごとでも、初めのうちは嫌々やっている場合が多いのですが、親に誉められるとか、先生に誉められたとかがきっかけで、それが好きになる、自分でやる気になる。つまり、自分が今やっていることに、意欲を持つことができる。意欲を持ってやることで、脳の中に自発的に神経回路ができるわけです。

好きと判断するのが「情」、司令信号を出すのが「意」、信号を受けて処理するの「知」です。つまり情・意・知という回路を頭の中に作るのです。「情」がその人のやる気・やらぬ気の原動力になるものです。情が起こると「やってみよう・やってみたくない」と言った「意」が湧きま

す。その意の力が課題に取り組もう、解決しようという行為となり、その産物として「知」が形成されるのです。

最近、小学校でも、中学校でも勉強嫌いの子供が増えたのは、いま言った、情・意・知の自然な流れを、いきなり難解な「知」からぶつけられることで混乱を生じ、勉強というものは難しい、嫌だという「情」を起こさせ、「もうやめた」という意欲喪失、つまり「意」の行動に追い込まれる結果に他ならないのではないでしょうか。

だから諸君は、我が比治山大学のキャンパス生活の中で、興味や関心を引くものを、何でもよいからまず見つけ出すことです。それは講義の題目でもよい、内容でもよい、また先生との出会いや会話の中でもよい。そしてそのことをまず「面白そうだ」、「好きになれそうだ」と近づいていこうという気持ちになることが大切です。つまり「情」が湧けば「意」が起こり、学ぶ楽しさが分かり、それが「知」となり充実した知的生活が約束されるようになるのです。だから、まず今日からこの大学が好きになること、ぜひ比治山大学を好きになって欲しいのです。そうなれば道は、自ずと開けてきます。明日といわず、今から実行して欲しいのです。

最後に、我が学園には、五訓という精神的バックボーンとなるモットーがあります。それは「正直・勤勉・清潔・和合・感謝」の５つです。これは学園の歴史とともに歩んできたものであることを知って欲しいと思います。そして私はそれに加えて諸君に、「独立して解析的に考える能力を養い、リスクを乗り越える勇気を持ち、創造的に行動する」という気概を持つことを薦めます。このことは、大学案内にもうたってありますが、現在の若い人々に欠けているものはチャレンジ精神ではなかろうかと思うからなのです。

中国の諺に「三日会わざれば即ち刮目すべし」というのがあります。「人は、僅か３日会わないうちに、どれほど勉強し成長しているかわからない。今度他人と会うときは、そのくらいの気持ちで、よく目をこすって相手の変化ぶりを見よ」という意味です。今日、ここで本学に入学を許可された諸君が２年間ないし４年間の勉励研鑽を積んでこの学園を巣立つときは、一回りも二回りも大きくなって、諸君の先生や両親達の目を見晴らせるような存在になるよう、ただいまから決意を新たにして、スタートすることを期待するものです。　　(H13. 4. 4)